分担研究概要

筑波大学心身障害学系
長畑正道

「乳幼児の発達に及ぼす家庭環境要因に関する研究」という分担研究課題のもとで，長期療育児研究班全体の研究目的を念頭におきつつ，多面的な研究をすすめて来た。即ち，正常乳児の発達（運動および感覚），障害乳幼児の発達，それにとくに障害乳幼児の家庭環境に重点をおいた。まだ第1年目で漸く研究の緒についたばかりであるが，その概略は次の通りであった。

1. 新生児，乳児の足圧測定による陽性支持反射と立位の発達の定量的解析（藤原順子，藪田敬次郎）

陽性支持反射及び立位の発達を正常新生児および乳児について，出生直後より歩行開始までの各月齢について，超低圧用圧力判別シートを用いて定量的足圧測定を行った。生後1～2か月では母指部に圧が高く，5～6か月になるにつれて全体に足圧がかかり，8～9か月では母指部の足圧が減少し，成熟型に近づいた。かかる正常発達に比べ，精神遅滞児，脳性麻痺児，Down 症候群児はそれぞれ特徴がみられたが，例数がまだ少く，各発達段階での特徴は今後の研究にゆだねられた。

2. 新生児期における聴覚的定位について（水野悌一）

新生児の片側の耳から10*cm*の位置でwhite noise，ガラガラ，ベルの音刺激を与えると新生児はガラガラに最もよく反応した。ガラガラによる眼球定位が最も早くあらわれ，ついで顔面の定位が出現し，生後1週間目で，刺激側上肢の払いのけ，ひっかき運動といった定位が出現した。このような聴覚的刺激に対する身体的反応をみることが脳障害の早期発見の一助となることが考えられ，危険児について今後研究をすすめて行く予定である。

3. ダウン症乳幼児に対する超早期教育の試み（長畑正道，池田由紀江，高橋　純，柳橋美智子）

月齢1～17か月のダウン症乳幼児に対してMacquarie University Down's Syndrome Program を参考にし，他のプログラムの項目も加え，2か月半の短期間ながら，粗大運動，微細運動，言語の各領域について母親指導を通した訓練を行った。MCCベビーテストでDQの平均が61から70に改善され，他の発達テストでも改善がみられた。まだ予備的段階であるが，その有効性がたしかめられた。

4. ダウン症児を持つ親の養育態度の子の発達に及ぼす影響（診断と親の養育態度）（池田由紀江，岡崎祐子，長畑正道）

ダウン症児のための早期教育をうけている42例のダウン症児をもつ親にアンケート調査を行った。回収率は95.2％であった。1か月までに診断された者が65％で，父母同席を望む者が多かった。ただその際，説明が適切であったのは15％にしか過ぎなかった。しかし早期訓練を開始してからは親の養育態度が著しく好転したものが多かった。したがって診断の際，早期訓練にすぐ移れる体制の確立が何より望まれる。

5. 乳幼児運動障害児早期家庭療育の指導に関する研究（高橋　純，藤田和弘，長畑正道）

まだ療育効果を判定する段階ではないが，対象児は50例で，脳性麻痺26例，精神遅滞

11例，その他13例である。具体的研究成果は次年度にまとめる予定である。

6. 中枢神経障害の疑われる乳児の発達と運動療法（石原　昂，舟橋満寿子）

中枢神経障害の疑われる乳児238例のうち運動障害の疑われる103例にVojta 法を中心とした運動療法を行った。この運動療法に比較的よく反応した群とあまり効果の上がらなかった群とにわけられた。その背景については，前者に比し後者に重い脳障害のみられる例が多かった。今後，どのような脳障害がその背景にあるのか，またどういった療法がより有効であるのか今後更に探求を深めて行く予定である。

7. 心身障害幼児の親の養育態度の研究（上出弘之，開原久代）

通園指導をうけている自閉的傾向の目立つ障害児群（A群100名）と精神遅滞が前景に立つ障害児群（B群160名）の親の養育態度を多面的に検討した。A群の親は口先きだけのかかわりが多いのに対し，B群の親は具体的に子どもに働きかけており，子どもの進歩も着実にみられた。しかし両群とも著しく子どもの状態が改善された30例の親はいずれも迫力のある養育姿勢がみられた。この背景に子どもの障害認知が大きく関与していた。

結　　語

正常もしくは障害のある乳幼児の発達，ならびに早期療育の効果，さらに親の養育態度について研究を行った。第1年目として，未だ十分な研究成果を上げるには至っていないが，研究は軌道に乗ったといえる。今後，早期療育プログラムについての検討もすすめながら，さらに分担研究課題の研究をおし進めて行く予定である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

結語

正常もしくは障害のある乳幼児の発達,ならびに早期療育の効果さらに親の養育態度について研究を行った。第１年目として,未だ十分な研究成果を上げるには至っていないが,研究は軌道に乗ったといえる。今後,早期療育プログラムについての検討もすすめながら,さらに分担研究課題の研究をおし進めて行く予定である。